

東北大学名誉教授 菊池武剋

きくち・たけかつ ●東北大学文学部卒業。東北大学教育学部教授、同大学院教育学研究科教授、同研究科長・学部長を経て2009年退職。14年宮城教育大学監事、15年東北大学名誉教授。日本キャリア教育学会会長(2008~12年)。専門は発達心理学、キャリア教育。

Message

キャリア教育の要としての 「特別活動」



これからのキャリア教育を考えるうえで、要と位置付けられた特別活動をどうとらえていけばよいのか。「一人一人のキャリア形成と自己実現」に向けて、特別活動はどのような役割を担うのか。日本キャリア教育学会の会長職も務めた東北大学名誉教授の菊池武剋氏に伺いました。

紆余曲折を経て浸透してきた
キャリア教育の理念と課題

キャリア教育とは何でしょうか。どこでするものなのでしょうか。

こうした現場の声に対して、どう取り組んでもらえるか試行錯誤してきたのがキャリア教育の歴史であり、私自身の研究の軌跡でもあります。

戦後の「職業指導」から「進路指導」を経て、1999年、中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてキャリア教育が提唱されてから20年が経っています。

2011年の答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」で、キャリアについて「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ね」と定義されました。

紆余曲折はありましたが、そうやってキャリア教育の理念は、少しずつ学校現場に浸透していったのです。少なくとも今、「キャリア教育って何？」とは聞かれなくなりました。

ただ、いまなお狭義の意味での「進路指導」と混同されているとか、指導場面が曖昧になっているという指摘があるのは事実です。

そうしたなか、2018年に告示さ

れた新しい学習指導要領の総則において、「特別活動を要としてつづ各教科・科目等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」と明記されました。

学校教育におけるさまざまな活動を通じて生徒が得た「気付き」や「学び」を、特別活動を中心につなぎ、積み重ねていくという、これまでキャリア教育が大切にしてきたことが、ついに明記されたわけです。

教科やさまざまな体験で得た気付きや学びをつなぐ

なぜ、つなげるのでしょうか。つなげるとどうなるのでしょうか。

つなげると、それまでバラバラに思えたことが、まとまって見えてきます。そして、「そう感じる自分って何なんだろう」と、次第に自分というものも見えるようになってきます。

さらに、小・中・高と段階をまたいで、それらをつなげていくことで、より一層、自分が見えてくるはずだ。

単につなげるのではなく、そこには連続性がなくてはなりません。自分という存在が、これまでもいて、これからもいつづける。そのように、一人一人の子どもの中でつながりを認識できることが大事なのです。

つながり、連続といっても右肩上がりの直線ではありません。途中、大小無数の段差があったり、高い壁もあつたりします。それを乗り越えていくわけですが、その前と後ろで、まったく違う自分に変化するわけではありません。それまでの自分に、新しい何か積み重なっていくような感覚です。よく「キャリア」は荷車の「轍」に例えられますが、筋道であるとともに、そこに至る過程で荷台に積んできたものすべてと言っていいたいでしょう。

そうやって、いろいろなものをつなぎ、積み重ねながら、自分で自分を形づくっていく。それこそ、学習指導要領にも登場する「一人一人のキャリア形成」なのだと思います。

私の住む仙台市では、「社会を支える25歳を目指して」をキャッチフレーズに、2006年から「仙台自分づくり教育」を推進してきました。中学生による3～5日間の職場体験活動を核とした仙台版キャリア教育です。

取組をはじめ10余年、当時、中学2年で職場体験活動を経験した若者と話す機会を得ました。皆しっかりと成長していて、まさに「社会を支える25歳」だと感じました。全員が当時の体験をよく覚えていて、何かしらの影響があつた様子。気付きや学びをつなげることで、自分をつくる取組だつたと思います。

ただし、職場体験活動は、キャリア教育の取組の一つではありません。本来、キャリア教育は教育活動全体で基礎的・汎用的能力を育むものです。学校内でその中心となりうる場となると、一人一人の生徒に働きかけやすい担任を中心としたホームルームを置いて他にありません。やはり特

キャリアとはつながりであり、積み重ね。さまざまな経験を振り返り、つなぐことで自分という存在が見えてくる

図1 ホームルーム活動の内容

(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現

- ア 学校生活と社会的・職業的自立の意義の理解
現在及び将来の生活や学習と自己実現とのつながりを考えたり、社会的・職業的自立の意義を意識したりしながら、学習の見通しを立て、振り返ること。
- イ 主体的な学習態度の確立と学校図書館等の活用
自主的に学習する場としての学校図書館等を活用し、自分にふさわしい学習方法や学習習慣を身に付けること。
- ウ 社会参画意識の醸成や勤労観・職業観の形成
社会の一員としての自覚や責任をもち、社会生活を営む上で必要なマナーやルール、働くことや社会に貢献することについて考えて行動すること。
- エ 主体的な進路の選択決定と将来設計
適性やキャリア形成などを踏まえた教科・科目を選択することなどについて、目標をもって、在り方生き方や進路に関する適切な情報を収集・整理し、自己の個性や興味・関心と照らして考えること。

※高等学校学習指導要領(平成30年告示)第5章特別活動より



「キャリア・パスポート」に期待。 なぜなら、「キャリア」というものを 直接、扱うことができるから

別活動こそキャリア教育の要。これが明記されたことは大変意義があることだと思っております。

小・中・高だけでなく、 その後のつながりも見越して

長くキャリア教育に携わってきた立場からすれば、今回の改訂の最大のポイントとは、ホームルーム活動の内容(3)として「二人一人のキャリア形成と自己実現」が設けられたことです(図1)。「キャリア教育の要」と示された箇所であり、教育活動全体の取組を、自己の将来につなげる役割を果たす大切な部分です。

今回、内容(3)が小学校にも設けられたことで、キャリア教育における小・中・高のつながりが明確になりました。考えてみれば当然のこと。小学校と中学校の間で、一人の人間が分断されるわけがないし、それは大学やその先の人生においても同様です。なのに、高校での勉強が大学での学びにつながる

らないという話もよく耳にします。キャリアとは本来、連続とか接続というニュアンスが含まれている言葉。日本語に訳しにくいのは、そのせいでもあるのです。

その内容(3)のなかで、一つだけ補足しておきたいことがあります。アの「学校生活と社会的・職業的自立の意義の理解」についてです。「社会的・職業的自立」という文言は、前述した2011年の答申を受けてのもですが、「自立」をどう捉えるかは、資質・能力論とも相まって、整理しておく必要があるでしょう。

資質・能力というと、その人単体の力と考えがちですが、能力とはそういうものではありません。他者からの援助を含め、何かを使って「できる」のであれば、それは本人の資質・能力として「できる」ということです。でなければ、人に支えられた時点で自立ではないことになってしまいます。障がいをもつ人が社会的・職業的に自



立できていないわけではないように、むしろ、然るべき時に、必要な援助をしっかりと求められる力が自立には欠かせないと思います。

とらえどころのないキャリアを 直接扱う「キャリア・パスポート」

特別活動が要として位置付けられたことで、重要な役割を果たすもの

と期待しているのが、学びのプロセスを記述し、振り返り、さらには未来につなげることができる「キャリア・パスポート」(22ページ参照)です。これにより、定義こそ何度かされてきたものの、とらえどころのない「キャリア」というものを、いわば直接扱うことができるようになるからです。

多くの職業が消え、働くことの概



教科の学びが、生徒一人一人とつながるよう、 教師が働きかけていく。 それができるのが要としての特別活動

ア・パスポート」こそないけれど、面談や声かけ、話し合い活動などを通して、生徒に自己理解を迫っていたのだと思います。

ただ、残念なことに、年齢構成上、素晴らしいホームルーム経営をしていた先輩の技を直接見る機会が減ったという声も聞きます。だからこそ、こうした自己理解や生徒理解のためのツールは、若い先生方の助けにもなるのではないのでしょうか。

高校の場合、教科の専門性故に横の連携がとりにくい実情はあるでしょう。しかし、お伝えしてきたように「つなぐ」ことはキャリア教育の基本です。「この単元とこの活動は関係がある」と形式的につなぐのではなく、一人一人の生徒においてつなぐ。「ああ、そういうことだったのか」と、生徒自身が、教科の学びと自己をつなげ、さらに将来につなげていく。

もちろん放っておいては生徒は気付かきません。特別活動を中心に、すべての学びが、自身とつながるよう、教師の働きかけが絶対的に必要です。そうしたアプローチが最もしやすいのが担任であり、特別活動です。

子どもたちの学びが積み重なり、未来へとつながっていく。それこそキャリア教育が大切にしてきたことであり、私が願っていることです。

念が変わると言われるなか、「将来どうなるかわからない」と不安を抱える若者もいます。しかし、それは今に始まったことではありません。確かに、変化のスピードは激しいけれど、未来、まして自分の将来がどうなるかなど、わかるわけがないのは、いつの時代も同じです。そのなかで人は悩み、もがきながら、その人らしく生きてきたわけです。だから、まずすべきは「自分は何者なのか」ということに、しっかりと向き合うこと。

そう考えたとき、「キャリア・パスポート」の果たす役割の大きさに気付くはず。感動した思い出や悔しかった体験も含めて積み重ね、折に触れて振り返る。そうやって自己理解を深めれば、将来、不測の事態がおこり、窮地に立たされたとしても、乗り越えられると思うのです。

思うに、これまでも優れた進路指導やキャリア教育の実践者は、そういうことをしてきたはず。「キャリア